

同一性の起源—何がそれを生んだのか—

Genesis of Identity: What Gave Birth to It?

川津 茂生 KAWAZU, Shigeo

● 国際基督教大学教育研究所研究員

Research Fellow, Institute for Educational Research and Service, International Christian University



文, 命題, 論理, 主語・述語関係, 述語的世界

sentence, proposition, logic, subject-predicate relation, predicative world

ABSTRACT

自己同一性は「わたしは何々である」と主語・述語形式の文で表明することで確立する。この主語・述語関係は単なる形式ではなく、主語が慈愛に満ちた述語的世界によって包容されてあることを示す形式である。主語・述語関係を論理的な言葉に翻訳し、数学的な関数関係として捉えることは、本来それが持っていた形式であると同時に愛の関係をも意味するという、関係性の豊かさを喪失させる。情報処理心理学の背景にある計算論的な論理学は、文が持っていた形式と内容の渾然一体となった、その本来の姿を表現することができない。論理的世界の手前に、形式が同時に意味でもあった言語的世界がある。同一性は、言語による述語的語りかけによって、世界の存在が述語的關係性によって包容され、主語・述語関係として成立したことに起源を持つのである。

Self-Identity is established by expressing “what I am” in a sentence with a subject/predicate formation. This relation between a subject and a predicate is not just a formation, but it indicates that the subject is embraced by a predicative world which is full of charity. Translating a subject/predicate relationship into logical words and regarding it as a mathematical functional relationship causes the loss of the richness of the relationship, in which the formation it originally had means the relationship of love at the same time. Computational logic behind information processing psychology cannot express the unified figuration of the form and content within a sentence. There is a world of the language where a form was a meaning at the same time before the logical world divides them into separable terms. Identity has the origin in that the existence of the world was embraced by the predicative relation expressed by the predicative talk of language and was established as a realization of a subject/predicate relationship.

1. 時代の中の心理学—近代的自我の確立を求めて

団塊の世代に数年遅れて生まれたわたしは、復興を目指して大きく躍動しながらも、いまだ戦後の混乱が完全には収まりきらない、未来志向という一応の目標を持つてはいたものの別の角度から見れば一種のカオス状態だったとも言えないこともない、高度成長期に前のめりになって邁進しつつあった日本社会の只中で子供時代を過ごした。

なぜあのような無謀な戦争をしたのか、という国民全体が持った反省とともに、これからは国民の一人ひとりが増えつつとしっかりと自立した人間として自己を確立し、責任を持った主体として、真に人間的な市民社会を築いていかねばならない、と多くの人が考えるようになっていた。

それぞれの人が主体性を持った近代的自我を確立するということが、きわめて重要な日本社会の課題として登場したのである。

日本人の自我は弱いということがしばしば指摘された。西洋人のように強く確立した自我を持ちたいと考える若者が増えて行った。そしてそれを達成できないことが、深い悩みとして語られていた。

戦後フランスに渡った森有正は、そこで自分とはまったく異質で非常に硬質なものに出会い、それをもっと深く知りたいという強い願いから、彼は長きに亘って彼の地に留まることになった。森は自己が真の主体性を持った人間として成熟して行く歩みを、ヨーロッパで生活することを通して歩むことを選んだ。

多くの若者が森有正に憧れた。そしてヨーロッパの成熟した社会と文化を知りたいと願った。

歳月が流れ、2009年に国立西洋美術館で開催された「ルーブル美術館展—17世紀ヨーロッパ絵画—」で、わたしは、デカルトの肖像画を観た。それが中学生のころからしばしば見ていた美術あるいは倫理社会の教科書に載っていた哲学者デカルトの肖像画であることは、わたしにもすぐに分かった。

その肖像画はわたしに啓示を与えた。そこには、

じつに岩のような存在感を持つ確固とした人間存在としてのデカルトその人が描かれていた。

その人自身またその人らしさというものがほとんど現れてこない、いわば能面のような顔ではなく、その人自身のそれまでのさまざまな困難を乗り越えてきた一日一日の人生の道のりが、そこに刻まれているかのような奥行きを湛える顔の表情、その人のこれまでの長い人生で培われてきた生きる姿勢そのものがそこに表現されているその人の佇まい、それらがそのデカルトの肖像画が圧倒的な力でわたしに啓示したことであった。

そのような存在感を持った人物になるということこそ、戦後の日本の若者が求めたことであった。それこそが、森有正がフランスでの生活を通して深く求めていたことであった。言葉や概念だけでは理解できなかった、森有正の言わんとしたヨーロッパの持つ硬質なものに、そのデカルトの肖像画を見たとき、わたしは初めて出会ったと感じた。

2. 自己同一性の確立の難しさ

新しい自己を確立するということは、日本社会特有の課題ではなかった。世界中の若者たちが、新しい生き方を模索した。第二次世界大戦の反省を踏まえて新しい社会を築くためには、新しい生き方と社会の在り方を確立することが必要であると、彼らは考えた。

日本ばかりでなく、ヨーロッパでもアメリカでも、学生運動が高まりを見せた。パリでも東京でもニューヨークでも、同時多発的に、それが起こった。

しかしその運動を通して、若者たちは、本当に新しい生き方を見出しえたのであろうか。

人がひとりの人として成長し自己を確立するということが、それが穏やかな時代に生まれた、とくにこれといった問題を持たない子供であっても、容易なことではない。

生まれ落ちてすぐに、まず、十分な愛着を持つことのできる養育者との出会いが必要であるし、その後の成長においても、そのときどきに必要な十分なケアが与えられねばならない。

また、環境的な要因の中には、十分な刺激や応答性も必要であって、とくに養育者や周囲の人たちからの、愛情のこもった応答性が大切なことは言うまでもない。

とすれば、第二次世界大戦という、途方もない破壊と殺戮の時代を越えて、新しい生き方とともに新しい社会を作ると言っても、愛情のこもった応答性とは無限にかけ離れた非人間的暴虐が世界中に横行していた時代を克服するということよりも、そのもっとずっと手前での、ひとりの人間としての誕生からの物語でもある、自己の成長と成熟のドラマを、一体どうやって、作り直して行けるというのだろうか。

そのような疑問が渦巻いていた1970年代の後半に、時代の渇きに答えるようにして、小此木啓吾の『モラトリアム人間の時代』が出版された。それを讀んだ多くの青年たちばかりでなく、多くの大人になり切れずにいた大人たちが、一種の安堵感を持ったことは想像に難くない。

自己を確立するまでモラトリアムすなわちしばらくの時間的猶予があるのだとすれば、それを確立するまで、まだしばらくの間は焦らずにゆっくりとやってもよいのだ、と思えたからである。

しかしその後、若者たちの自己同一性の確立への模索はどうなっていったのであろうか。

モラトリアムに甘えてのんびりしている間にさらに年月は流れ、当初の真剣な自己確立の探求はいつの間にか忘却されてしまったのではないだろうか。

そしてそれに替わって、近年では「自己肯定感」という言葉が登場してきた。

しかし、いったい自己肯定感を持つというとき、その自己とはどのようにして確立された自己であり、またどのような自己の在り方としてそれは定義されているのであろうか。

そもそも、戦後の若者たちがあれほど苦しんだ、新しい内実を持った、新しい時代を築く上では欠かせない、確実な公共的社会的基礎となりうるような自己同一性の探究に対する、真に内容を持った形での継承性を失ったままの自己肯定感であるとしたら、それをどのように評価したらよいので

あろうか。

1960年代の学生運動が沈静化していったあと、そのとき深く探求されたはずの、新しい生き方と新しい社会の在り方の問題は、現代では、平板化された心理学が提示する模範的回答を暗記して、マルティプルチョイスのマークシートに正解をマークすることによって解決される問題へと変貌してしまっただけであらうか。

3. 文の主語・述語形式によって表明される自己同一性

振り返って哲学に目を向けるとき、デカルトは「われ思う、ゆえに、われあり」（デカルト、1997）という思考によって自己同一性を確立していたのだとも言える。

エリクソンも言うように、アイデンティティの確立とは、「わたしは何々である」、としっかりとと言えるようになることである（エリクソン、1973）。

デカルトが方法的懐疑によって自己を一切の外部から遮断した上で遂行した推論の妥当性は別として、彼が「わたしは考える」から「わたしは在る」と言う根本的な自己についての確信を導き出し、それを表明していることは間違いない。

デカルトは自分が何であるかを、「わたしは在る」として断言した。

このように、自己のアイデンティティを確立するとき、一人称を主語とした文の形式によって、主語（一人称）に述語を添え、主語としての一人称を述語づけて語る以外の方法はありません。

主語と述語の間には関係性があり、それが主語・述語間の関係性であると同時に、むしろ述語それ自体が関係性を表現しているということから、主語に述語を添えることによって、主語の表すものが述語的關係性において捉えられ、その關係性の場所において定位されるのである¹⁾。

言い換えるなら、述語が表現する關係性が開く場所において、主語は受容されているのである。

デカルトがコギト・エルゴ・スムを他から切り離された彼自身の私的な思考であると主張して

も、「わたしは考える」そしてまた「わたしは在る」という文は、その文の形式自体が主語・述語形式であるのであるから、一人称が関係性の場所において受容されて在るという、主語・述語関係を表現するものであることを否定することはできない。

人間が自己同一性を表明するときの文の形式が、一人称である主語が述語的關係的受容性によって受容されて在ることの自覚の表明でもあるという、この驚くべき事実を見つめ直して行くとき、そこに隠されていた自己同一性の起源の本来の姿が立ち現れて来る。

なぜなら、主語が述語的關係的受容性の場所によって包まれて在るというその在り方が、自己同一性の起源が主語・述語形式の立ち現れることの中にあることを証していると考えられるからである。すなわち自己同一性とはそれを表明する主語・述語形式の成立することそのものであると考えられるのである。

まず主語・述語形式があつて、そこに自己同一性が内容として付加されていくことで自己同一性が成立するというのではなく、主語が述語的關係性によってそのいわば慈愛に満ちた關係的受容性に包まれて在るという形式的安定性を授与されて在ること自体が、主語であるものが何で在るのかというその根本的な定義とも言えるその自己同一性の起源なのである。

言い換えるなら、主語の表すものの安定した自己同一性は、安定した主語・述語關係が開いていく述語的關係性の場所において安定的に定位されることで、すでにそこに安住できる住処を持つことになるのである。

4. 文・命題・論理²

自己同一性を表現するときの文の形式が主語・述語形式であることが、上に述べたように、主語にあたるものが述語的關係的受容性によって包まれてあるという構造を持っているのであれば、それは、文から命題を汲み出し論理へと組み立てていく論理的な構造的展開の出発点あるいはその

起源における関係性の出現の在り様が、いわば他なるものを包み込んでいく慈愛に満ちた述語的世界による包容であったことを証している³。

文の形式がそのような背景を持っていたのだとすれば、同じように主語・述語形式で表現される原子命題というのもの、ひとつの基本的な分解できないブロックとしての命題、すなわちそれ以上分析できない岩のように凝固した思考の根本的な土台ともなるいわばアプリアリな形式などではなく、本来的には世界が根源的受容性に包まれていくプロセスによって可能となった事態、すなわち述語的受容性によって主語の安定的居住が生起していくプロセスから出現した歴史的形物なのだと言える⁴。

時間を逆行的に溯源するなら、原子命題によって出現する原初的な論理的世界すらもが、原子命題の主語・述語形式の成立のプロセスを齎した原初的な関係性のドラマによって出現し、支えられて来たのではないだろうか。

命題の主語・述語關係は、一般的には、ひとつの塊として固定化されて捉えられるが、本来的な成り立ちからすれば、それは、相対する存在の間における対他的關係性の成立を俟って初めて可能となった、述語的世界の持つ根源的受容性の場所的包容を表現する形式なのである。

命題の「SはPである」という判断形式が、それ以上分析できない基本的なブロックなのではなく、むしろ命題形式そのものが述語的世界の場所的包容から立ち現れたものであつて、本来単一なブロックではなかった在り様が、述語的受容性からの関与的包容によって一つの纏りとして包み込まれたことで、分離不可能なブロックとして形成されたのだと言える。

ブロックとしての命題を積み重ねることで哲学的思考が可能になるのだとすれば、一つひとつのブロックがどのようにして塊としてのブロックになったのかという、その起源に対する洞察がなければ、土台としてのブロックの出自が不明の状態に留まることになる。論理的思考のはるか手前で、いまだいかなる関係性も無かったところに述語的關係性が出現したということ、言い換えるなら、

そこに述語的受容性が出現したこと、すなわち慈愛に満ちた述語的世界の包容が出現したという原初の出来事があったのである。

5. 論理的世界の自然化の誤謬

20世紀における科学的心理学の飛躍的發展によって、その根幹を担った情報処理心理学の思考法が哲学の主要な課題を継承したのだ、という一般的な認識が広まった。

哲学研究者の中にすら、カントの言うように悟性概念が感性的直観に与えられる多様なものを取りまとめるのだとしても、その具体的な脳内のプロセスは、今や情報処理心理学で理論化され、認知心理学の実験的手法によって検証されるという方法で、科学的に解明されうようになったのだと認めて、哲学者としての自信が揺らいでしまいかねない戸惑いを持ったものもあつたであろう⁵。

論理は脳の情報処理システムの上に実装化されている神経回路での計算によって実現しているのだと、当然のごとく考えられるようになり、その結果、哲学的論理学と科学的心理学の垣根が実質的に取り外されてしまったかのような印象が優勢になった（沢田，1962）。そして、心理学の学会などでは、それこそが当然の共通理解になった感すらあつた。

意識の科学的解明は困難であるといわれていたが、それは意識を実現している情報処理の仕組みが複雑であることから解明が進まないだけなのであつて、いずれ科学的心理学の進歩によって意識も科学的に解明されるのだと信じられていた。意識の統合情報理論などがその可能性を切り開く有望な理論として、熱心に研究されていた⁶。

科学的心理学は強い説得力を持つので、実験によるデータを統計学的に分析するという手法が採れない研究分野は、哲学であれ精神分析学であれ、科学的には意味がないのだと考えられる傾向が強かった。1980年代にわたしが在学したコーネル大学の発達心理学の講義でも、実験的な検証が出来ない哲学や精神分析は科学的には意味がないと語られていた⁷。わたし自身も、そのような考え

方がもっとも新しい考え方なのだと理解し心中でまったく同意していた。

科学的心理学によって人間の認知の中核部分さらにまた無意識の推論の部分さえもが科学的に説明されるようになり、実証的裏付けも盛んになされた。人間の論理的思考やその上に成立する自己同一性を表現する命題の脳内表現の真の姿の解明も間近に迫っていると、多くの心理学者が考えていたであろう。

人間の類似性の主観的判断のプロセスを説明する数理的モデルすらもあるのであるから、あらゆる認知の情報処理過程が脳内の計算のあり方として解明され、現象学的な現れすらもいずれは客観的な情報処理過程によって実現された脳内での計算の裏面に過ぎないと実証されるであろうという信念が、知的世界の主流な考え方となって定着し始めたのである。

情報処理心理学の発展の背景にはコンピュータの進歩があつた。計算する機械としてのコンピュータが進歩し、複雑な計算そして論理的な計算が可能になったのである（萩谷・西崎，2007）。その背景には、命題論理と述語論理の数理的な展開があつた。

命題のはじまりは主語・述語形式の原子命題であつた。もちろん主語・述語関係は文の形式なのだが、文は文のままでは意味に曖昧さが残る場合があるので、そういった曖昧さを持たない命題として文を形式化することが必要だとされた。その方向性で命題論理が作られ述語論理が生まれたが、その過程で、一体われわれが上において解明した文の主語・述語形式の持っていた述語的受容的關係性は、その形式の論理的な解釈によって保存されたのであろうか。

文の主語・述語形式が命題として捉え直される時、その本来の慈愛に満ちた述語的受容的關係性による主語に表されたものの包容という、いわば対他的な愛の關係性とすら言える本質は大きく変貌していく。「関係」という概念が論理的な概念として捉えられると、それは数学的な集合Aから集合Bへの元の対応となり、さらには、一意対応としての写像または関数と同義になっていく。

このことにより、主語であったものは変数 x 、そして述語は関数 F となる。これによって、主語・述語関係であったものが、 $F(x)$ という関数形式で表現されることになるのである（日本数学会、1954）。

このような理論化が計算理論の背景にあるとすれば、文の形式としての主語・述語関係であったものが、いかに激しく再解釈されて、結局は単なる関数関係として $F(x)$ という集合間の一意対応に過ぎないものに変貌していったのかに驚きを禁じ得ない。

いま一度振り返るなら、われわれに初めから与えられていた主語・述語関係は文の持つ主語・述語関係であった。その本質を哲学的に探っていくなら、そこにはいわば、慈愛に満ちた述語的世界が他なるものを包容していく愛の関係そのものがあったのであった。

とするなら、そのような愛の関係が、文の意味を明確にするという意図から命題として捉え返され、論理的な関係へと再解釈されていく過程で、単なる関数性へと変貌させられたその解釈のシフトは、どのような根拠を持っていたのであろうか。

関数として解釈された関係性は、もはや意味内容を持たないのである。「形式論理が計算機科学にとって重要である理由の一つは、これらが構文論と意味論の区別と関係について学ぶため」に役立つからである（萩谷・西崎、2007）言われるように、そこには構文論があるだけなのである。

文の形式が結局構文論へとなっていったことで、原初的にわれわれに与えられていた文の主語・述語形式が単なる構文などではなく、その形式の起源にこそ慈愛に満ちた述語的世界の発見があったのだという、形式と意味が渾然一体となった始まりの愛の関係は無限に忘却されてしまった。

関係概念が関数概念へと再解釈され、論理的な構文が情報科学によっていかに厳密に研究されたとしても、在るものの同一性が現れてくる起源における形式と意味の一体となった原初の愛の関係を復元することはまったく不可能である。

関係概念の関数概念へのシフトは、もっとも大

切なものを切り捨てながらのシフトだったのであり、それを実行することは技術的には大きな価値を持ったが、それが存在や同一性の本質を把握する方法として相応しいと判断できる根拠はどこにもないのである。

6. 語りかけの同一化による始まり

言語を習得するとき、子供は養育者から語りかけられる。発語が一語や二語の段階では、子供はまだ文を話すことができない。養育者が語りかけによって、子供の言語発達を促すとき、養育者は子供の発語に対して、述語を付与しているのではないだろうか。養育者が子供の代わりに述語を語ることで、子供はその述語を自己の発語に結びつけ同一化していくことが可能になる。そして同時に子供の発話は養育者からの述語的受容性に包容されるのである。子供は安心して、その述語を自己の述語とし主語・述語の文を語り得ようになるのであろう。養育者は、子供が述語的世界によって受容されてあること確かさを付与しているのである。

あたかもそれと同じように、超越的受容性が養育者の慈愛を込めて述語的な語りかけをした。語りかけられた無に過ぎなかった主語的なものが慈愛に満ちた述語的世界に包容され、世界がそれによって主語・述語関係を構造として持つ存在として立ち現れた。その主語・述語関係を論理的な言語に翻訳した上で、それによって世界を科学的に分析できたとしても、そこにおける主語・述語関係の論理的解釈は、本来の関係性の豊かさを切除した一面的な解釈に過ぎない。

本来の主語・述語関係は、その形式が初めから慈愛に満ちた包容そのものとしての関係であったのあり、その形式が現れたことが奇跡的な愛の表現だったのである。

とすれば、はじめに「光あれ」（日本聖書協会、1992）という言葉があったように、「あれ」という述語の語りかけがあり、それが表現する慈愛に満ちた述語的世界の包容がこの被造世界を存在へと呼び出したのだとも言えるのである。

そうであるからこそ、この世界には主語・述語関係が貫いているのであり、その関係をたとえ狭隘化された論理的な意味の関係として再解釈したとしても、ほぼ問題なくその水準での科学的分析がどこまでも可能なのである。

しかしだからと言って、存在とその同一性の起源において、論理としてではなく、言語としての言葉による語りかけがあったのだということを忘却することはできない。

同一性の起源は超越的受容的存在の「あれ」という慈愛に満ちた語りかけだったのである。

注

- 1 文の主語・述語形式が関係性の形式であり、それが基本的には述語が表現する関係において主語が位置づけられてあるという構造の形式であるということは、さまざまな形で指摘されている。西田幾多郎も述語性に注目した(西田, 1987)。中村雄二郎は西田幾多郎の述語的同一性の考え方を高く評価し、それを著書『場所』(中村, 1989)および『述語的世界と制度』(中村, 1998)において独自に展開した。
- 2 わたしがこの節で述べることは、西田幾多郎と中村雄二郎から学んだことに基づいている。しかしそこからわたし自身が自由に展開した内容である。
- 3 ここで、「述語的世界」という表現は、中村雄二郎の『述語的世界と制度』(中村, 1998)から借用したが、中村の用い方を厳密に踏襲しているわけではない。
- 4 歴史的というのは、万物の始原があったとするなら、そこから始まる自然的世界の一切の時間的な展開を含んだ意味であり、自然誌をも含む。
- 5 カントは感性に与えられる多様なものが悟性概念によってまとめ上げられるとしたが、それによってたんなる心理学的な認識の理論を提示したのではなかった。彼は、科学的必然性に浸透されている世界において、なんとかして人間的な自由を確保しようとしたのだと見られるべきで、だからこそ科学的には意味のない超越論的主観性ということを主張したのである。そこにあった科学的必然性と人間的自由との闘い合いの戦いを忘却してはならない。数年前のある研究会で、心理学に対する不必要な譲歩が哲学者の発表の中にあったと感じたことがある。わたし自身も、Anne Treisman教授が共著者ととともに1980年にCognitive Psychologyに発表した論文、A Feature Integration Theory of Attentionを読んだとき、それがほとんど信じられないほどの華麗さで、感性的情報が注意によって統合されていく認知的処

理過程の理論を実証的に研究した論文であって、いまや哲学的認識論は心理学的方法によって解明されていくべき実証科学の問題へと変貌したのだと確信した。しかしそうであるとするれば、人間的自由の問題はどこへいったのであろうか。その後認知心理学ではCognitive Ethicsという言葉も使われて、倫理学の研究もされるようになった。しかしそれらはどれも自由の問題をその本来の姿では論じることができない、科学的必然性の内部の議論であって、自由を確保しようというカントの凄まじいまでの格闘とは似ても似つかないものである。そもそも科学の前提からして、自然主義的な世界を越えた自由の世界は問題にすらならない。なんとかして人間的自由を確保し、それによって真の意味での倫理的世界を確立しようという、本来の哲学的思考の篤き思いはそこではすでに失われているのである。

- 6 第31回国際心理学会学術第会(2016, パシフィコ横浜)での多くの聴衆を迎えた公開シンポジウムで、統合情報理論の最先端の研究状況の発表があった。そのときの質疑応答で、発表者が、来年には意識の理論がほぼ完成するであろうという予想を語り、さらに聴衆からの質問に答える形で、将来ロボットも意識を持つようになるであろうという発言をしたと記憶する。
- 7 1980年代前半のCornell Universityでの発達心理学の講義で、「実証的な検証ができない研究は科学的には評価がでないので意味がない」、と聞いたことは、強くわたしの印象に残った。また当時の心理学の教科書では、哲学者をarmchair psychologistと揶揄することがしばしばあった。

引用文献

- デカルト, R. (1997). 方法序説 岩波書店
エリクソン, H. E. (1974). 自己同一性—アイデンティティとライフサイクル— 誠信書房
萩谷正巳・西崎真也 (2007). 論理と計算のしくみ 岩波書店
中村雄二郎 (1989). 場所 (トポス) 弘文堂
中村雄二郎 (1998). 述語的世界と制度 岩波書店
日本聖書協会 (1992). 小型聖書 (口語)
日本数学会 (1954). 岩波数学辞典第3版 岩波書店
西田幾多郎 (1987). 場所・私と汝他六篇西田幾多郎 哲学論文集I 岩波書店
沢田允茂 (1962). 現代論理学入門 岩波書店